日本人だけが知らない世界の常識

第六話　しぐさ編（後編）

【立小便は死刑？】

　あるアメリカ人ジャーナリストが現地の通訳を雇い、アフガニスタンとパキスタンの国境にある地域を取材していた。

　ここは、昔から暮らす部族が支配している土地である。乾いた荒野に、ところどころ土をかためてつくられた家が建っている。住人たちは、みな熱心なイスラーム教徒ばかりだった。

　アメリカ人ジャーナリストは、この場所にスクープを求めてやってきていた。一部報道によれば、国際テロ組織アルカイダのボスであるウサマ・ビンラディンが潜伏しているということだった。なんとかしてその証拠を見つけ、新聞の一面を飾りたいと思っていたのである。

　しばらく荒野を歩き回っていたら、緊張のためか激しい尿意を催した。アメリカ人ジャーナリストは丘の上にあがり、ジッパーをおろし、立小便をしようとした。そのとき、突然銃声がとどろいた。見ると、丘の下に集落があり、村人たちが銃を撃ってきたのだ。

「逃げろ！」と通訳が叫んだ。

　アメリカ人はわけもわからず、下半身を丸出しにしたまま全力で逃げた。

　どうしてこんなことになったのだろう？　これはアルカイダの仕業か？　それともウサマ・ビンラディンが潜む隠れ家に近いのか？

　だが、あとで通訳が説明したところによると、この地域ではイスラーム教が厳格に信じられており、山とはいえ公の場で立小便をするのは、イチモツを女性に見せるのに等しいということだった。それは、他人の妻を犯すことと同義であり、絶対に立小便をしてはならないという約束事があるのだそうだ。つまり、ここは立小便が死刑にも等しい罪として考えられている場所だったのだ。

　アメリカ人ジャーナリストはそれを聞いてホッとした。戦場をかけまわるジャーナリストとしては、立小便をした罪で殺されては格好がつかないと思ったからである。

　これは、私がアメリカ人ジャーナリストから聞いた話です。私自身、この地域を何度も歩いたことがありますが、一緒にいたガイドから、立小便は危険だから気をつけろといつも注意されました。宗教的な理由で、公の場でイチモツが見えるような行為をしてはならないのです。

　では、この地域に暮らす人々は立小便をしないのでしょうか。

　イスラーム教徒とはいえ、男性は男性です。歩いていて、不意に尿意を催すことはあります。そんなとき、彼らはしゃがんでおしっこをするのです。

　日ごろ、彼らは膝下まである長いシャツを着て、ブカブカのズボンを穿いています。イスラーム教徒の服装です。そして、用を足すときは道端にしゃがみこみ、上着の長い裾を

エプロンのようにして下半身を隠してから、ズボンからそっとイチモツを引っぱりだして、キョロキョロと周囲を警戒しながら行うのです。

何も知らずにその姿を見ると、麻薬でも吸っているように見えます。しかししばらくすると、足の間からツツツーとおしっこが流れてきてアスファルトに黒い筋ができる。それを見てようやく、「ああ、彼はおしっこをしている最中だったのか」と気がつくのです。これがイスラームの国における立小便ならざる、「すわり小便」です。

ちなみに、最近、日本ではすわり小便をする男子が増えているそうです。『週刊ポスト』の記事によれば、パナソニック社が行ったアンケートで「家で小便をするとき、立ってしますか？　すわってしますか？」という質問に対して、五十六パーセントの男性が「すわっている」と答えたのだとか。

一時代前は、「立小便は男子の本懐」ぐらいの雰囲気がありました。ガニ股になって小便をし、最後はイチモツをふって滴を落として終了。これが男気だとされていたのです。しかし、最近の若者は個室ですわって用を足し、マイティッシュで滴を拭くようです。時代の移ろいとともに、用の足し方も変化しているということなのでしょう。

ただ、今流行のエコの観点からすると、これはあまりほめられたことではありません。洋式のトイレで水を使用した場合、大便用で十五リットル、小便用で五リットルもの水をつかうのです。一日五回トイレにいけば、相当な水量になるのがおわかりでしょう。

世界で活躍するＮＧＯのＰＲ広告風の言い方に直すと、「世界では十一億人の人たちが安全な水を手に入れられずに苦しんでいるのに、日本ではトイレで一人当たり二十から五十リットルぐらいの安全な水を浪費している」ということになります。

これが良いか悪いかは別にして、世界の一部の国では「女性も節水のために立小便をしよう」なんてビックリするような運動があるようです。実際、中国の学校では女性の立小便器まで登場しています。次のようなものですね。

◎http://post.news.tom.com/s/2D000AB22729.html より

日本人女性がこのトイレに入って、中国人の学生が立小便をしているのを見かけたら、ショックで愕然とすることでしょう。「プライドも何もかも捨て、ここまでしなければならないのか」と頭を抱える人もいるかもしれません。

とはいえ、まだまだこうしたトイレは普及しているとは言い難いです。女性の場合、身体の構造的に立小便がしにくいのです。突起するものがない以上、当然です。

そこで、ある企業がすぐれた商品を開発しました。女性用立小便グッズです。世界に複数あり、アメリカで売られているものはその名も「ゴー・ガール」。台湾で売られているのは「立可尿」。いずれも、女性が次の写真のようなグッズを股につけて、立ったまま便器に向かって用を足すようです。

◎http://www.go-girl.com/what-is-gogirl.asp より

これがどのような場所でよくつかわれているかというと、主にコンサートなどのイベント会場だそうです。コンサートなど休憩時間が決められている場所では、トイレ不足が大きな問題となります。男性用トイレはガラガラなのに、女性用トイレは会場の外まで大行列ができているということがよくあります。ときには、我慢できずにこわばった鬼のような顔で男子便所に入ってきて用を足すオバさんもいます。

トイレの行列に並ぶ女性のなかには、「ああ、女性も男性のように立小便ができて、さっさと用を足せれば、こんなに待たなくてもいいのに……」と思ったことのある方もいるでしょう。そう、この立小便グッズはそんなときのために配られているのです。

会場のトイレの入り口でこれを受け取り、中でサッと装着し、ササッと用を済ませ、ササッと立ち去るのです。

日本のイベント会場でも、こうしたものが当たり前のようにつかわれる日がくるのかもしれません。

【愛犬家】

日本でアラビア語の勉強をした夕菜さん（二十三歳）は、大学卒業後に、中東のシリアという国に留学した。いまだにイスラームの教えがかたく守られている国である。
彼女は、数少ない女性の留学生として一生懸命勉強に励んだ。ゆくゆくは、アラビア語の翻訳者として映画の字幕製作に携わりたいと考えていた。
学年末の試験が終了した日、夕菜さんは同じクラスの女学生たちを自分のアパートに招いた。静かな住宅街のアパートで、一人暮らしをしていたのである。夕菜さんについてきたのは、シリアで生まれ育った女学生ばかりだった。
家についてドアを開けると、飼っていた犬が尻尾をふって近づいてきた。犬は愛おしそうな声をだし、夕菜さんの顔をペロペロとなめまわした。夕菜さんは自慢げに言った。
「この犬、かわいいでしょ。いまは、この犬と一緒に暮らしているんだよ。私が学校から帰ると、いつもうれしそうに顔をなめてくるの」
友人たちはそれを見て、青ざめたまま黙っていた。夕菜さんは気にせずに、「ほら、あなたたちもかわいがってあげて」と犬を近づけた。すると、女学生たちは「ギャー！」と大きな叫び声をあげ、退いた。
「どうしたの？　みんな、犬が嫌いなの？」
「嫌いとかそういう問題じゃないわ。もしかして、あなた毎日犬に顔をなめられているの？」
夕菜さんは微笑んで「もちろんよ」と答えた。すると、女学生たちは顔を引きつらせた。
「冗談じゃないわ。あなたのような汚い人と付き合うのはお断りよ。二度と近くに寄らないで」
彼女たちはそう言って帰ってしまった。一人ぼっちになった夕菜さんは、しばらくしてからあることに気がついた。
イスラームでは、犬は穢れたものとされて遠ざけられている。ばい菌の塊のように見なされているのだ。特に唾液には菌が多いと考えられ、触れたらしっかりと洗わなければならないとされている。さすがに最近は、欧米に倣ってペットとして飼う人もでてきたが、それでも唾液がついたときは、すぐに洗ってアルコールなどで消毒をする。
女学生たちもそう思っていたため、犬に顔をなめられている夕菜さんの姿を見て、驚愕したのだろう。
翌日、夕菜さんは学校で友だちに事情を説明しようとした。日本の文化を説明すれば理解してくれるだろうと思ったのである。だが、彼女たちは夕菜さんに声をかけられると、恐れをなしたように逃げてしまった。文化の壁はそこまで高かったのである。

イスラームでは、犬は不浄の生き物とされています。かつては狂犬病の犬が多くいましたし、実際、野良犬などは様々な菌を保持していました。おそらく、そうしたことから、伝統的に犬を遠ざける習慣が生まれたのでしょう。
今でもイスラームの国を旅していると、このことに気づかされることがあります。野良犬がイスラーム寺院に入ろうとすると、人々が本気で殴ったり、石を投げたりして追い出す光景に出くわすのです。犬によって神聖な場所が穢されてしまうという考え方なのでしょう。
彼らは、犬でもっとも不潔なのが唾液だと考えます。古くからの習慣で、犬の唾液が体

についたら、そこを七回洗えと教えられています。それだけ汚らしいものと考えられているのです。
　夕菜さんの体験談の背景には、こうした文化の違いがあります。
　日本人は、犬が顔をなめるのは愛情表現だと考えてあまり気にしませんが、イスラーム教徒たちはそうはとらえなかったのです。飼っているだけなら文化の違いで済む話でも、顔をペロペロとなめられている光景を目の当たりにすると、さすがに引かざるを得なかったのでしょう。
　私も、ヨルダンというイスラームの国で似たような事例に遭遇したことがあります。
　ある日、首都アンマンに暮らす西洋人がホームパーティーを開きました。その家では犬が飼われていましたが、パーティーに出席した地元の人たちは欧米の文化を熟知していますから、あからさまに犬を嫌う仕草を見せるようなことはありませんでした。
　ところが、立食パーティーがはじまると、犬が匂いにつられてやってきます。人々が手に持っている料理の匂いをかごうとするのです。そのとき、招待客の一人が急に怖い顔をして犬を蹴り飛ばしました。「ギャイン！」という鳴き声が響き渡ります。何があったのでしょう。西洋人が事情を尋ねると、招待客はこう言いました。
「この犬が、鼻を俺の手にこすりつけたんだ！」
　ここで初めて知ったのですが、彼らにとって犬の濡れた鼻は「唾液」と同じく、もっとも不潔なものとされているのです。招待客は犬が匂いをかぐために鼻をくっつけてきたので、とっさに蹴りつけて追い払ってしまったのでしょう。
　しかし、こうした文化の差は、イスラーム教徒が私たち日本人を見るときにだってありますよね。
　たとえば、日本人はゴキブリを嫌いますが、世界的に見れば、あんなに過剰反応をするのは日本人だけではないでしょうか。シリアでもヨルダンでも、レストランにゴキブリがいたって、誰一人、何の関心も寄せません。しかし、日本人となると、やれ殺虫剤をまけだの、やれこの店は不潔だのと言いだします。イスラーム教徒からすれば、日本人の言動は「？？？」ですよね。不浄の観念というのは不思議なものです。
　ところで、イスラーム以外の国では犬をペットとして飼う習慣がありますが、国によってどんな犬が人気だかご存知ですか？　統計によれば、次のようになっているそうです。

ペットとして人気の犬

【日本】
　１位　ダックスフント
　２位　チワワ
　３位　プードル
【アメリカ】
　１位　ラブラドール・リトリーバー
　２位　ゴールデン・リトリーバー
　３位　ビーグル
【カナダ】
　１位　ラブラドール・リトリーバー

２位　ゴールデン・リトリーバー
３位　ジャーマン・シェパード・ドッグ
【イギリス】
１位　ラブラドール・リトリーバー
２位　ジャーマン・シェパード・ドッグ
３位　コッカー・スパニエル
【ドイツ】
１位　ジャーマン・シェパード・ドッグ
２位　ダックスフント
３位　ジャーマン・ワイヤーヘアード・ポインター
【フランス】
１位　ヨークシャーテリア
２位　プードル
３位　カバリア・キング・チャールズ・スパニエル
◎http://www.wanwan-puppy.com/dog-rating.html#3 より

日本人は小型犬を好みますが、欧米諸国では大型犬の人気があるようですね。
ちなみに、ペットフード協会の調査では、日本で飼われている犬の数は約一一八六万匹、猫は約九六一万匹にのぼるそうです。

【トイレのドア】
良助君（二十一歳）は、アメリカに留学していた。二年目の夏、日本の父親がリストラにあい、学費が払えなくなってしまった。そこで、彼は複数のアルバイトを掛け持ちし、なんとか自力で卒業しようとした。
彼が暮らしていたアパートは家賃が高かった。そこで、トイレが共同の安いところを探して引っ越した。毎日六時間アルバイトをすれば、家賃を払っても食費と学費はなんとかまかなえた。
ところが、アパートを移ってから一カ月後、突然大家さんから出て行くように命じられた。その理由は次のようなものだった。
「あなたは、アパートの住人にいやがらせばかりする。住人たちからクレームが相当上がってきている。これ以上放っておくと、大きなトラブルに発展してしまう。どうかその前に出ていってほしい」
良助君は、いやがらせをした記憶がまったくなかった。そこで尋ねてみると、大家さんはこう言った。
「週に何度か、あなたはトイレに誰かが入っているように見せかけて、他の人たちを困らせているでしょ。そのせいで、住人たちはトイレをつかえないでいるの。これでどれだけの人が困ったことか。そういうことをする人には住んでもらいたくないわ」
「ちょっと待ってください！　僕はトイレにそんなことをしたことはありません」
「嘘をつかないで！　あなたがトイレのドアを閉めて立ち去るところを、何人かの人が見ているんだから！」

良助君が自分の過ちに気づいたのは、このときだった。
アメリカでは、トイレのドアを完全に閉めないのがエチケットだ。閉めると、誰かが入っていることになってしまうのである。彼はそれを忘れており、日本にいるときと同様、トイレを出るときにきちんとドアを閉めていたのである。

日本では、トイレのドアをきちんと閉めるのがエチケットです。開けっ放しにしていたら、どんなにだらしない人間だと思われるでしょう。ところが、国によっては、トイレのドアは半開きにするものだと考えるところもあるのです。公衆トイレばかりでなく、個人宅のトイレのドアも半開きにすることがあります。
欧米のトイレで日本人がしがちな失敗として、このドアの問題以外に、ノックがあります。日本ではドアを閉めるのが習慣なので、ノックをすることで中に入っているかどうかをたしかめます。一方、海外では、トイレのドアをノックすると、「さっさと出てくれ。待っているんだから」という意味になってしまうのです。そのため、ノックをしたことで、出てきた先客に嫌な顔をされたり、文句を言われたりすることもあります。
地域を変えて考えると、アジアや中東のトイレでしがちな失敗は、トイレットペーパーの使い方に関するものでしょう。
アジアのトイレでは、用を足した後、水と手でお尻を洗うのが一般的で、トイレットペーパーを使用するようにはできていません。そのため、トイレの水量がもともと、とても少なく設定されているのです。もし日本人が、日本にいるときと同じように遠慮なくトイレットペーパーをつかって流そうものなら、紙がつまり、下水があふれてきてしまうのです。
私自身、若かりし頃に、何度かこの失敗をしでかしたことがあります。悲しいのは、こうした国にはラバーカップ、通称「バッコン」とか「スッポン」とか呼ばれているトイレがつまった際に使用する用具がないことです。
もしつまったら、スプーンのようなものでつついたり、つまったブツをだしたりしなければならないのですが、海外のトイレでそれを一人ですることほど空しいことはありません。
かつて、この屈辱から逃れるために、トイレがつまった後、すぐにチェックアウトして別のホテルにうつろうとしたことがあります。旅のなかで、すでに二度も同じ過ちを犯しており、うんざりしていたのです。しかし、お金を払ってホテルを出た途端、清掃のおばちゃんが追いかけてきてつかまり、
「トイレが詰まっている。チェックアウトするなら片付けてからしろ」
と言われてしまいました。
おばちゃんに監視されながら、膝をついてつまったモノを片付けたときのなさけなさ、そして自己嫌悪は、今でも忘れられない記憶として残っています。
海外に行くとき、食事や礼儀などの常識の違いはいろんなところで教えてもらえますが、トイレでのエチケットや常識はなかなか学ぶ機会がありません。国際交流における「落とし穴」といえるかもしれませんね。